

## 【4-1405】釧路湿原にて超高密度化状態となったシカの管理を成功させる戦略と戦術 (H26～H28)

吉田 剛司 (酪農学園大学)

### 1. 研究開発目的

本研究では通信型発信機での実証事例がないシカの日周行動の把握を試みる。釧路湿原では環境省主体でGIS情報を整備して湿原周辺の土地利用の変化などを把握しつつある。このようなGIS情報基盤を活用してシカの超高密度化による生態系物質循環への影響とシカの時空間利用を解明して地図化することで、地域協働による管理システムに結び付けた緊急性と新規性の高い研究を行う。そのためにもまず湿原内にシカ排除柵を設置し、土壌と湿原植生に及ぼす影響を把握する。次に周辺の森林にも調査区を設置し、シカの日周行動を最新のGPS発信機を用いて把握することで広域でのシカ管理戦略を立案する。さらに地元での意見交換会等により、地域と連携した広域(道・市町村)の捕獲体制を目指す。

### 2. 研究の進捗状況

#### サブテーマ(1)

釧路湿原の過去の空中写真を用いたGIS空間解析より、シカの分布を時系列で評価する。シカを生体捕獲してIridium通信型GPS発信機を装着し、位置データの取得を開始した。また、シカ排除柵を用いた野外操作実験を開始した。

#### サブテーマ(2)

釧路湿原及び隣接越冬地の航空機調査を実施し、シカの広域の分布を明らかにするとともに、湿原および湿原周辺のシカの密度構造を明らかにするために既存データの整備を行った。湿原周辺における植生の調査地選定及び予備調査を行い影響把握手法を検討した。希少鳥類(タンチョウなど)の冬季の湿原の利用状況について、関係者との連携のもとに情報収集及び現地調査を行い、情報共有基盤の構築を図った。

#### サブテーマ(3)

シカ管理を広域で実現する際に必要となる市町村間の情報共有について、地理的な距離だけではなく組織体制の違いが情報共有にどのように影響を与えるかを明らかにした。釧路湿原でのシカ管理における地域住民のステークホルダーを抽出した。また、シカ管理や湿原保全への地域住民の問題意識を調べ、市民参加型のシカ管理を実施する際の課題を整理した。

### 3. 環境政策への貢献(研究代表者による記述)

季節移動の追跡結果により、釧路湿原のシカが行政界をまたいで季節移動していることを明らかにし、シカ管理ユニットを考える上で、市町村の連携が重要であることを明示した。

環境省釧路自然環境事務所が主催する「釧路湿原エゾシカ対策会議」において、本研究成果を提示し情報共有を図った。今後、自然公園法に基づく「釧路湿原国立公園生態系維持回復事業」に活用されることが予想される。また、北海道釧路総合振興局が開催した「エゾシカ捕獲計画検討会」、同振興局と標茶町鳥獣被害対策協議会が開催した「エゾシカ捕獲対策検討会」のそれぞれに対して研究成果に基づく情報提供を行った。

各行政組織(環境省や林野庁、道、市町村)に加え、地域スケールでの生態系および社会をもとに多様な関係者との横断的な連携体制の土台を構築することができたのは、釧路湿原におけるシカ管理の戦略立案に向けて非常に大きな意義がある。例えば、2014年12月に釧路で開催した「釧路湿原におけるシカ管理と希少生物保全の両立」シンポジウムの実施などにより、タンチョウを始めとした釧路湿原に生息する様々な希少野生生物の保護に取り組むコミュニティとの情報交換網を整備できた。さらに、地元住民からもシカ管理に対して積極的な意見が得られ、シカ管理に市民参加を促すきっかけとなった。

#### 4. 委員の指摘及び提言概要

知床に比べ人間の居住地に近い国立公園のため、広域管理計画及び管理ユニットについて地域住民を含めた合意形成を重視し、次のステップを進めていただきたい。また、サブテーマを統合化して、戦術 (how) へのフィードバックが望ましい。一方、土壌影響の評価の位置づけをはっきりさせること、エサ資源とシカの行動やシカの増加要因の特定など新しい科学的知見の収集の観点の弱さなど、若干の見直しも必要である。

#### 5. 評点

総合評点： A